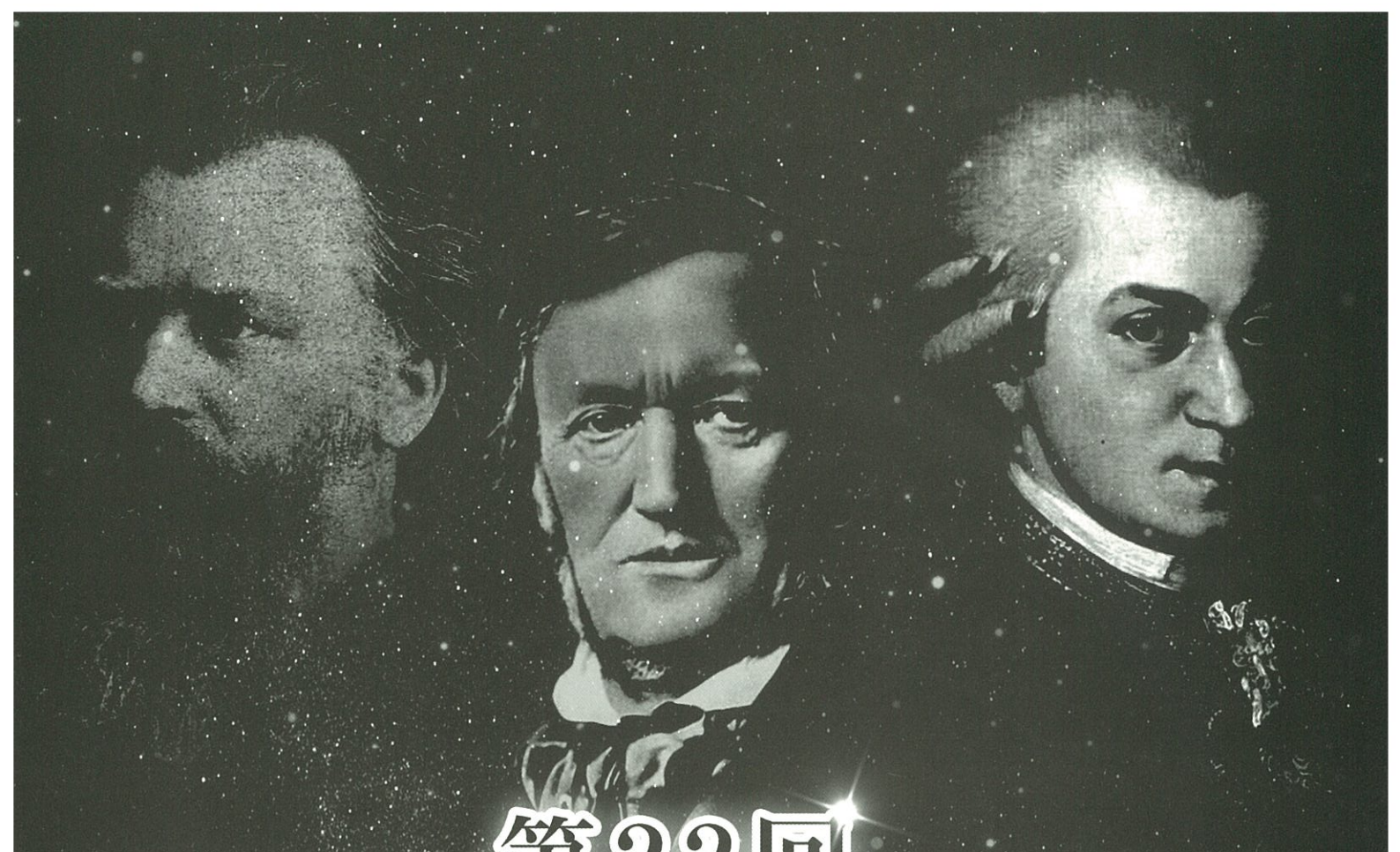

第22回
春日井市交響楽団
定期演奏会

2013年
7月7日(日)
春日井市民会館

主　催：春日井市交響楽団
後　援：愛知県教育委員会、春日井市、春日井市教育委員会、(公財)かすがい市民文化財団、中日新聞社

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
伊　藤　　太

お祝いのことば

このたび、第22回春日井市交響楽団定期演奏会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

今日のように変貌著しい社会にあって、音楽を愛し楽しむことは、人々の心に深い感動と癒しを与え、心豊かな生活の実現に欠かせないものとなっています。本年で22回目を迎える本演奏会は、音楽を楽しんでいただく機会を市民の皆様に提供する場として大変意義深いものであり、市制70周年の節目を迎え、文化とスポーツの振興を目指す本市にとりましても誠に心強く、関係者の皆様のご尽力に深く敬意を表する次第です。

今回も、オーケストラをはじめ様々な分野で活躍されている岸本沙恵子氏の指揮にのせて、愛知県を中心に各種コンサートでご活躍中の山田ゆりあ氏の澄みきったフルートの音色と管弦楽による洗練されたハーモニーが、観客の皆様を魅了することと期待しております。

結びに、本日の演奏会の成功と貴楽団のますますのご盛栄を心からご祈念申し上げ、お祝いのことばとさせていただきます。

春日井市交響楽団
会長

中部大学　学監
三　浦　昌　夫

ごあいさつ

本日は、第22回春日井市交響楽団定期演奏会へご来場いただき、誠にありがとうございます。

日頃から多大なるご支援をいただいております賛助会員の皆様、そして何よりも演奏会へお越しくださる聴衆の皆様に支えていただき、22回目となる定期演奏会を開催できることに心より感謝申し上げます。

今回は、2011年からご指導していただいている岸本沙恵子先生との集大成となる演奏会で、ブラームスの交響曲第4番を取り上げ、岸本先生の表現力豊かな指揮により、きめ細やかで深みのある演奏をめざして取り組んできました。ソリストには、愛知県出身のフルート奏者山田ゆりあさんをお招きし、あの「のだめカンタービレ」ですっかり有名になったモーツァルトの協奏曲をお聴きいただきます。

共に演奏する喜びを求めて集い、寸暇を惜しんで練習に励んだ団員は、今年も皆様への感謝の気持ちを込めて演奏いたします。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

そしてこれからも、春日井市交響楽団へ温かいご支援を賜りますよう重ねてお願い申しあげます。

プログラム
Program

ワーグナー（1813〜1883）
Richard Wagner

「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲
Die Meistersinger von Nürnberg
Vorspiel

モーツァルト（1756〜1791）
Wolfgang Amadeus Mozart

フルート協奏曲 第2番 二長調 K.314
Konzert D dur
Für Flöte und Orchester

第1楽章　Allegro aperto
第2楽章　Andante ma non troppo
第3楽章　Allegro

《休　憩》 ***Intermission***

ブラームス（1833〜1897）
Johannes Brahms

交響曲 第4番 ホ短調 作品98
Sinfonie Nr.4 e moll op.98

第1楽章　Allegro non troppo
第2楽章　Andante moderato
第3楽章　Allegro giocoso
第4楽章　Allegro energico e passionato

指　　揮　岸　本　沙恵子

フルート独奏　山　田　ゆりあ

演　　奏　春日井市交響楽団

プロフィール

指　揮

岸本　沙恵子

Kishimoto Saeko

神奈川県出身。幼少の頃より、ピアノを始める。
県立希望ヶ丘高等学校吹奏楽部にて、学生指揮者を務めたのをきっかけに指揮者を志す。
2003年3月洗足学園音楽大学声楽専攻卒業。
在学1年次より、同大学附属指揮研究所に在籍。ベーシッククラスを経て、2004年9月、マスタークラスを修了。
指揮を秋山和慶、河地良智、川本統脩の各氏に、スコアリーディングを島田玲子、西川麻里子の各氏に師事。
2003年7月より、現在において東京指揮研究会主催の指揮セミナーにて、ウィーン国立音楽大学指揮科准教授の湯浅勇治氏に師事。2007年度、ローム・ミュージック・ファンデーション受講。指揮を湯浅勇治氏に、スコアリーディング・ソルフェージュを三石潤司氏に師事。
2007年度、アフィニス音楽祭のオーディションに合格し、指揮研究員として参加。
同音楽祭にて、読売日本交響楽団正指揮者の下野竜也氏に指揮の指導を受ける。
オーケストラ、吹奏楽、合唱、オペラと幅広く活躍中。

フルート独奏

山田　ゆりあ

Yamada Yuria

名古屋市立菊里高等学校音楽科卒業。愛知県立芸術大学卒業。桐朋学園大学研究科修了。
第49回全日本学生音楽コンクール名古屋大会3位入賞。
第14回名古屋演奏家育成塾コンサートにて奨励賞受賞。
ウインド・アンサンブル・オブ・アイチのメンバーとしてポーランド、ハンガリー、ドイツ各地にて音楽祭、演奏会に出演の他、愛知を中心に各種コンサートに出演。
トレバー・ワイマスタークラス、浜松国際管楽器アカデミーにてA.アドリアンクラス、ルジカ・ルタアカデミーにてR.エイトケン、C.カンタン両氏のクラスを受講。
フルートを西村智江、橋本量至、富久田治彦、長山慶子、野口龍、寺本義明の各氏に師事。
室内楽を菅原眸、中川良平、村田四郎の各氏に師事。愛知を中心に、ソロ、室内楽活動を行う。

春日井市交響楽団

春日井市交響楽団は、ベートーヴェンの「第九交響曲」の演奏会を春日井市で開きたいという市民の思いから生まれました。1990年（平成2年）11月に創立され、市内の音楽愛好家を中心に、「市民が演奏し・市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として活動を始めました。愛称『カポ』（KAPO）は英字名称「KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」（capo　頭・先頭に立つ者）の思いもあります。毎年、7月の定期演奏会と12月の「春日井市民第九演奏会」を中心に、数多くのオーケストラ活動を行っています。団員は、会社員・公務員・教員・医師・主婦・学生・自営業者などからなる50名。私たちにとって最大の喜びは、一人でも多くのみなさまに演奏会においでいただき、音楽を聴く喜びとともにクラシック音楽が好きになっていただくことです。そのために、「春日井で名曲の名演奏を」と心がけています。また、「春日井の開かれた音楽の窓」となって国の内外の最高の音楽家との共演にも努めています。これからも、さらに、市民のみなさまに親しまれ、愛されるカポとして、市民音楽活動をつづけて参ります。温かいご支援をお願いいたします。

曲目解説

「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲

リヒャルト・ワーグナー（1813−1883）作曲

「ニュルンベルグのマイスタージンガー」は、ワーグナーが作曲した唯一の喜劇です。マイスタージンガーとは、中世ドイツのギルドが与えた称号の一つであり、「親方歌手」という意味です。

さて、この物語の舞台は民衆芸術栄える16世紀中頃のニュルンベルグ。この町にやってきた青年騎士ワルターと隣家の娘エファは恋に落ちます。ワルターはエファが翌日に開かれる歌合戦の優勝者の花嫁となることを知りますが、参加するには親方歌手の資格が必要でした。そこで、歌の試験に挑みますが、審査員の親方のうち、書記官ベックメッサーは、恋敵であるワルターの歌を非難し落第させてしまいます。そのとき、靴屋の親方ザックスは彼の歌の新鮮さに可能性を感じていました。そして、ベックメッサーをおとしいれてワルターを歌合戦で勝たせ、二人の仲を取りもつのでした。

この前奏曲には、劇中の主要動機が随所に詰まっています。冒頭は「親方歌手の動機」であり、活気あふれる街の様子を表しています。それに続いて、フルートとクラリネットで演奏されるのは「愛の動機」であり、ワルターとエファの出会いを想起させます。そして中間部、木管楽器のスタッカートで演奏される「親方歌手の動機」は、ベックメッサーが恋を妨害する様を描いています。それはやがて、意地悪な親方を市民が嘲笑し、ワルターに味方する様を表す「嘲笑の動機」によってかき消され、最後に「親方歌手の動機」が響き渡り、青年騎士の若い力によってますます民衆芸術は栄えていくであろうという希望に満ち溢れ、曲は締めくくられます。

（Cl. 小久保）

「フルート協奏曲第2番」　W・A・モーツァルト

（1756−1791）作曲

この曲を初めて聴く人も「あれ、この曲？」と思うのではないでしょうか？ ドラマ「のだめカンタービレ」（これをみてクラシック音楽に興味を持った人も多いそうです）の中で黒木君が鮮やかに演奏していたハ長調のオーボエ協奏曲を、フルートの明るい音色が活きるニ長調に移調したのがこのフルート協奏曲第2番です。モーツァルトに作曲を依頼した、フルート愛好者で裕福な商人ド・ジャンは、すでに発表されていたオーボエ協奏曲の転用だったことが不満だったようで、約束の報酬を払わなかったそうです。同じ曲の編成を変えて演奏する事は、バロック音楽の時代には当たり前だったのですが、音楽のパトロンが教会や宮廷から町人へと変わりつつある時代でした。この曲の中で、ソナタ形式を律儀に守るオーケストラと、形式に捉われず自由奔放に歌い踊るソロフルートとの駆け引きも、変化の時代を反映しているのかも知れません。

第1楽章でフルートは颯爽と登場するやいなや、ヴァイオリンが第1主題を型通りに演奏するのを中途で断ち切るように上へ下へと遊び心一杯に動き回ります。後半第1主題の再現でも、ソロフルートは途中で突然短調に転調してしまうなど、終止躍動的にめまぐるしく動きまわります。オーケストラはソロを支え合の手を入れ、引き立てます。フルートの登場を導いたトリルと分散和音のモチーフによって、フルートとオーケストラは随所で対話し、最後もこのモチーフをヴァイオリンとオーボエが効果的に重ねて終わります。

2楽章もソナタ形式ではありますが、フルートは型にはまらず、アリアのように表情豊かに歌いこんでいき、オーケストラはこれを支え対話していきます。

3楽章ではフルートソロは冒頭のロンド主題の提示をするなど、よりオーケストラと緊密にアンサンブルしながら流れをリードしていきます。主題を拡大した音形による中間部の対位法的な展開が聴き所です。

楽譜はとてもシンプルなのですが、モーツァルトはいたるところでハッとするような音の戯れを仕掛けています。一つ一つの音がすべて有機的につながっていくので、音そのものが楽しく戯れているという趣があり、聴き手は心地よい流れに身を任せていることができます。次の交響曲第4番では、ブラームスが工夫を凝らした仕掛けで聴き手をこれでもかと驚かせ揺さぶるのと対照的に、モーツァルトは仕掛けを見せないように工夫を凝らしているかのようです。演奏者にとっては、絶妙にリードしてくれるパートナーと踊っているように、この仕掛けに逆らうことなく流れに乗りながら、自分の音楽を表現していくところが醍醐味でしょう。

（Fl. 宮田）